

2017年度 日本気象学会東北支部第2回理事会 議事録

日時：2018年3月6日（火）16時10分～17時20分

場所：仙台管区気象台第4会議室

出席：大林、藤田、桜井、岩崎、境田、青木、福山、杉山、名越、和田（以上理事）、小池（会計監査）、山崎、岩淵、齋藤、武樋（以上幹事）（敬称略）

司会：桜井理事

議題1．2018年度秋季大会実行委員会の設置

- ・議案を承認した。
- ・第1回実行委員会を1月に、第2回を本日開催し、会期、会場、シンポジウム、業務発注などの案件を議論し方針を決定している。
- ・会期については10月29日午後～11月1日、会場は国際センター。期間は前回仙台開催時より広げ3日半とし、発表時間を確保するようにする。運営に関しては、今年度の札幌大会で、事前申し込み者に大会参加票を事前送付する取組が初日受付の混雑緩和に効果的であったことから、仙台大会でも外注の範囲を拡大して対応するなど、精力的に準備を進めている。
- ・小倉名誉会員より多額の寄付を頂き、理事会で活用方法を検討した結果、秋季大会で記念レクチャー（オグラ・レクチャー）を実施することになった。今回に関して言うと、講師は海外のメソ気象の専門家を招待する予定で、これから毎年秋の学会では記念レクチャーを実施する予定である。このほか、ジュニアセッションや普及啓発活動などに利用することを検討している。もしここで有効な活用方法の提案があれば、全国の理事会に諮りたいと思う。

議題2．2017年度事業報告及び会計報告

- ・議案を承認した。
- 1) 東北支部気象講演会
気象災害がテーマということで人々の関心が高く、大学内での開催にもかかわらず、100名を超える参加者があり、質疑応答も多く、盛会だった。
- 2) 支部強化基金による活動
集中豪雨をテーマに、講師の方に非常にわかりやすく話をしていただき、参加者同士で活発な議論が行われた。一般からの参加者は少なかったが、予報士はサブファシリテータ役を含め10名以上の参加があった。参加者の内訳の詳細、反省点などをまとめ、後日理事会メンバーにも共有予定。
- 3) 東北支部気象研究会
今年度も旅費補助をきっかけとして学生の入会があり、研究会への旅費補助は会員を増やす一定の効果があった。研究会自体についてもバラエティに富み、活発な質疑応答がなされていた。
- 4) 東北支部だより
85号は、大学の中堅の先生方に研究内容について寄稿して頂いた。86号は現在編集中だが、実際の気象台業務を学会員にわかりやすく紹介する寄稿があり掲載する予定。
- 6) 日本気象学会奨励賞の推薦
推薦対象者を探したが、天気や大会発表となると研究を本務にしないものにとってはハードルが高く、地方気象台長等にも照会したが見つからず、推薦なしとなった。引き続き候補者を探す努力を続けた

い。

- ・是非若手を勇気づける意味でご尽力いただきたい。
- ・支部気象研究会における气象台からの発表もそれなりのレベルのものがあるものの、論文にまとめるまで取り組むとなると時間的に厳しいと見られる。打破できるとよいと思うが。
- ・奨励賞には何か要件があるのか。

明確な基準としては「研究者以外」ということである。その上で、何かを発表して外に認められるということがあり、天気や学会はその基準になるが、それ以外についてはどう評価するかが難しい。支部研究会での発表も積み重ねであれば選択肢の一つとして検討してみたい。

- ・推薦者は他の支部からも上がりにくい状況にある。若手を励まし、学会を身近に感じてもらうという意味もあるので、ぜひ推薦していただければと思う。

議題3 . 2017年度会計報告

- ・議案を承認した。

議題4 . 2017年度会計監査報告

- ・議案を承認した。

議題5 . 2018年度事業計画案

議題6 . 2018年度予算案

- ・議案を承認した。

(1) 東北支部気象講演会

地元の大学との協力について

- ・本年の気象研究会は山形大学の参加が少なかったが、来年山形で開催予定の気象講演会においては、山形大学の関与はどのようになるのか。
- ・例年であれば气象台を通じて地元の大学に協力を依頼するのが通例だが、来年度に関してはまだ大学関係者にコンタクトはとっていない。
- ・2012年に山形で気象講演会を開催した際には、防災科学技術研究所雪氷防災研究センター新庄支所の阿部支所長と山形大学の柳沢教授に講演を依頼した。現在も研究会への投稿を呼びかけるなど、事務局では山形大学との関係を保っている。
- ・山形地方气象台のお天気フェアで山形大学の教員が学生を連れてブースを設けており、气象台とのつながりはあるとみられるが。
- ・教育学部の防災関連の講義を气象台職員が担当するなど、气象台と山形大学での連携はある。
- ・福島大学の渡邊明教授が山形大学の講師を勤めていたと聞いており、山形大学は気象の専門家が少ないとみられる。
- ・人脈が少ない状況であれば、早めに動き出す必要があるのではないか。新年度の担当で話し合いながらやり方を検討してほしい。

(5) 支部強化基金による活動

主催のあり方について

- ・気象サイエンスカフェ東北のチラシを作成した際、主催団体が2つ、共催団体が2つという表現はおかしいのではという意見が出た。予報士会は分担金を、气象台は会場を提供しており、団体毎の対応に違いがある。来年度に向けてご検討いただければと思う。
- ・元々は予報士会本部から気象学会と予報士会が対等な立場で開催するようと言われており、主催に2つの団体を並べるのはそのためと認識している。
- ・対等な立場ということであれば、主催という書き方をやめて学会と予報士会の共催という形にしては

どうか。位置づけの区別にあたっては、共催ではなく後援にしてはどうか。会場や名義を貸す程度であれば、後援でもよいのではないか。

- ・気象講演会も同様の問題がないか。学会が主催、地方気象台が共催という扱いたが。
- ・主催はメインとなって行う団体、共催は一步下がって手伝うというところで、若干の違いはあるように思う。
- ・気象講演会は、主催を学会東北支部、共催を地元地方気象台として実務を気象台が担っていたが、学会と地方気象台を同じ立場においてもらったほうが現場としては動きやすい。共催という位置づけだと定義があいまいになるため、担当者に対してフルパワーで仕事をするよう命じるべきなのか、一步引いた立場で努力できる範囲で仕事をするように言うのか、迷いが生じた。また、細かい話になるが、共催という立場では講演会で気象台の封筒を使用することもためらわれた。主催にしてもらえればそういった問題についても悩む必要がなくなる。
- ・気象台も主催として、あとは後援とすればよいのではないか。共催だと中途半端な感じになる。
- ・多少の矛盾があったとしても、現場の人がやり易いというのが重要である。
- ・研究機関と気象台で講師を出し合っており、対等な立場で主催としても違和感はない。
- ・取り組み方における立ち位置の問題については、気象台の内でも整理したい。

会場について

・気象サイエンスカフェ東北の会場費開催費について、本年度は会場費がかからない気象台で開催したのに対し、来年は気象台以外を会場とする予定とのことだが、来年度の予算額を本年度当初の予算額から減らしても問題はないのか。

本年度は飲料の購入・お菓子の購入のみで約1万円の出費となったが、来年は会場費として、過去の実績も参考に約1万5千円を見込み、合計の予算を25,000円とした。なお、本年度当初の予算案で開催費を35,000円としているのは、昨年度にエル・ソーラで開催した際には会場費に約2万円かかったことを考慮してのものである。

・会場の予約においては、利用団体間の競争が激しく、会場によっては抽選となったり、また講師との都合をあわせたりなど、いつも確保や調整に苦心している。管区気象台だとそのような負担が減るかと思うのだが、管区気象台で開催するとした場合の不都合な点があるようであれば教えてほしい。

気象台開催でメリットはあるが、気象台が仙台駅から遠いということもあり、気象台で毎年開催するとなると必ずしも好ましいことばかりではないというのがこれまでの理事会で議論されてきたところである。また、気象台を会場とする場合でも予約の手配・調整は苦勞する。

・今回の気象サイエンスカフェの一般参加者が少なかった理由については後日ワーキンググループで議論する予定だが、会場が気象台としたことと関係するのかわかりづらいところ。今回は気象台見学会も開催し、それを利用して集客できると見込んだが、それほどでもなかった。

・東北大学の片平キャンパス内にある片平さくらホールは中心部に近く利便性が良いと思われる。ただし、利用可能団体を大学関係に制限している、利用団体によって利用料金が変わるなどといったことがあるかもしれないので、利用を検討する際には申し込みの時期なども含め、調べておく必要がある。

1年前より予約可能。1時間につき2,600円（使う広さによる）。

・官公庁の採用説明会にはフォレスト仙台を利用している。一般団体でも利用できるが、料金は不明。
・過去には中心部から離れた天文台、また科学館、日立システムズホールといった地下鉄沿線の施設を会場としており、新しい聴講客を探す・呼ぶために挑戦するなど、試行錯誤を繰り返してきた経緯がある。

・地下鉄沿線ということなら、駅から近いという点で、東北大学青葉山キャンパス内の青葉山サイエンスホールも候補として挙げられる。

・事務局としては秋季大会もありスケジュール的には厳しく、お茶とお菓子を提供するスタイルもとれないかもしれないが、毎年夏に開催しているサイエンス・デイのひとつのイベントとして先着順受付で

開催するという手もあると思われる。

多くの団体がブースを設けて色々なものが見られるなかで、2時間拘束するというのは厳しいのではないか。

1時間程度の講演にする、トークのやり方を工夫するなどすれば、好きな人には足を運んでもらえるのではないかと思う。

議題7．検討事項

・議案の通り。

会費の改定について

・「天気」でも方針が示されているが、会費値上げについてはインパクトが大きい問題として各支部から意見が出されていた。会員数が減少するなかで、値上げが必要なことを丁寧に説明していく必要がある。

・今まで会員数減に対して対応をとって来なかった分、値上げ幅がかなり大きくなっているが、学会の意見募集ページなどを通じて、忌憚のない意見を寄せてほしい。

・値上げせざるを得ない状況であるということを理解してもらうため、収支・赤字の額などを出して今後の運営に支障が出るということを見える形で分かりやすく説明することも必要ではないか。

天気や学会のホームページには一応資料を掲載しているが、何を提示すべきかを含め、分かりやすい資料の出し方には苦心している。現時点でわかりやすく、誤解の生じにくいと考えられる資料を提示しているが、不明な点があれば本部に意見を寄せてほしい。

・月5百数十円で、毎月天気がもらえるという意味では、今までかなりお得なサービスをしてきたのではないか。この問題に対してもう少し早く手を打ってあげればというものがある。

・収支見通しの元となる会員数の見通しはどうなっているのか。減少一辺倒なのか。

減少してきている。大学側の会員数は横ばいで、気象庁職員の会員が特に少なくなっている。

・収支の年々変動は、刊行物の数や大会の運営形態の違いの影響を受けてかなり大きい。これが現在の財政状況を見えにくくしている要因なのだが、年々変動を差し引いて現状を把握するということが足りていなかったというのが本部の反省としてある。

・理科教育学会では「理科の教育」という雑誌を年12回刊行しており、この雑誌は市販もしているが、会員になると市販価格より安く購入できる。このため、物理、化学、生物、地学の各教育学会の会員数が減少する一方で、理科教育学会は会員数が年々増えている。また会費の額をお得に感じやすい金額設定にしている。現在の気象学会は、他の学会と比較すると安い会費になっているが、金額の桁数が上がるような変更をしないほうが会員数減を抑えられるのではないか。

・今回の額は会員数減少を見込んだうえで、5年後に収支が均衡するような形で設定した。本部事務局の負担が増えるので難しい部分もあるが、より短期での均衡をとる形にして、その変動をモニターし、まめに額を調整するというようなこともあってよいのではと思われる。

・若手の意見についても聞いてみたい。

若手に今回の値上げについて聞いてみたところ、海洋学会など他の学会との比較で考えればその位の負担はありえるのではという声がある一方で、サービスを利用する機会の少ない会員にとっては今回の値上げは大きいという声があった。気象台職員にとって学会員であることのメリットが少なく、勧誘もやりづらい状況にある。

・防災という視点を積極的に取り入れ、予報士会や土木関係の学会ともつながりも持ち、天気の記事や学会のセッションにおいても扱う分野を広げることができればと思う。学問の発展のためにいろいろな人がいるということが重要であるので、裾野を広げ、いろいろな分野の人をとりこむ形で、新しい会員を獲得できればと思う。

・学会で大学教員、気象台職員、民間の職員が相互交流を持つ機会があればよいと思う。

議題 8 . その他 (事務局から)

- ・ 議案を承認した。

東北支部会員数 (個人会員)

- ・ 個人会員は昨年 9 月から 3 名減少。毎年 6 名程度減少している。今回は気象研究会の旅費補助をきっかけに学会に入会してくれた学生があり、これにより減少幅が小さくなっていた。
- ・ 支部だより 85 号でメールアドレスの登録を呼びかけ、メーリングリストを通じて支部の情報を届ける試みを始めた。支部メーリングリスト登録者数については 3 名増となった。

旅費について

- ・ 昨年の支部長会議での議論をふまえ、理事会参加に係る交通費を現状に合わせるため、今回の理事会から仙台、岩沼の旅費を 500 円に改定したい。ご確認の上、承認いただきたい。
理事より承認された。

以上